

記念誌「相中相高八十年」より  
(創立期 その7)

♪ 校歌誕生 ♪

1908年の10月会津方面を目的地とした「五年級修学旅行記」(「学友会雑誌」第四号)に、「旭日に照らされて紫に彩色された吾妻山が天を摩している、ああ壯観々々、思はず識らず車内には校歌が始まって車輪の音に調子を合わせる」という記述がある。

校歌が制定されたのは、1906(明治39)年から1908年の間と推定される。

## 1 作 詞

相馬中学の國漢の教師 吉成新太郎<sup>(註1)</sup>氏が作詞者になった事情は、1961年当時の本校教頭佐藤政宏の(第27回生)問い合わせに対する手紙に、述べられている。

「生徒の方から校歌がほしいとの意見を取り入れ、……だがそれを誰に命じたとも無く、誰が作ることも決めて居ませんでした。当時年若かで盲目蛇におじなかつた私の試みに作ったのが採用され芳賀博士の校閲を経て校歌となったのでした。

……

当時は一般の中等学校にはあまり校歌などは無く、私の脳裏にあったものは、例の一高のそれ位でした。福島県下では多分最初のものでなかったかと思います。

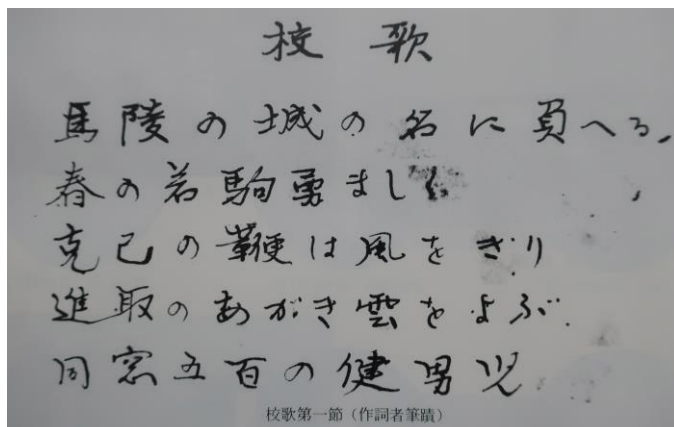
その当時は日露戦争後で、国民の思想の最も高揚していた頃で、それが自然反映されて居たように思います。それに一般東北地方がそうであったように、相中の学生も質実の美風はありましたが、進取とか意気とかいう点についてやや遜色あるように言われていました。

それで、一節二節で克己、進取、意気などを強調したのでした。

第三節に君子の風度などと古めかしい詞を出しましたが、あれは山鹿素行の土道の中に風度の語が見え、一塵染めざる光風霽月の心境を言っていました。私の心はそれに惹かれて居て、青年純真の氣を歌って見たのでした。

第四、五節は相馬附近の史跡から、顕家郷、二宮翁の遺徳をのべたもの。之にも時代の思想が反映して居ると思はれます。

第六節は高い理想とそれに到達する深い学問の探求に尽力すべきを述べて結びました。



作詞者 吉成新太郎氏筆蹟

## 2 作 曲

作曲者渡邊貞雄<sup>(註 2)</sup>氏は、福島縣師範学校在職中の 1908(明治 41)に、相馬中学校校歌を、1911年には磐城中学校校歌を作曲している。磐城中学校校歌は、相馬と対照的な、4分の3拍子の朗々とした曲調である。

現在の校歌は、創立 90 周年を迎える 1988(昭和 63)年、尚美学園大学教授岡崎明義氏(高 20 回卒)が、恩師であった国立音楽大学教授の藤田玄蕃氏(註 3)に依頼して編曲されたものである。連綿と歌われている実情にあわせて歌いやすく、また吹奏楽の演奏にも即した編曲となっている。

(註 1)秋田県生まれ

(註 2)山形県生まれ

(註 3)東京都生まれ

(7 月 15 日 転記&文責 村山)